

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：32802  
研究種目：基盤研究(C)  
研究期間：2011～2013  
課題番号：23520879  
研究課題名(和文) 歴史・宗教文献を利用した預言者ムハンマド時代の総合的研究

研究課題名(英文) Studies for the Prophet Muhammad

研究代表者

医王 秀行 (Ioh, Hideyuki)

東京女学館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：20269426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：預言者ムハンマド時代の歴史的諸問題を、歴史書、コーラン解釈書、ハディース文献、地理書、人名辞典などを用いながら総合的に研究した。

その過程で「預言者ムハンマド伝」第3巻、第4巻、岩波書店も刊行することができた。「預言者ムハンマド伝」の歴史書、宗教書、詩などに見られる文学書としての性格についても分析し、今後のムハンマド時代の研究の基盤作りをめざした。また、アッバース朝期に成立した預言者伝は、ウマイヤ家やマフズーム家に対する否定的な評価が盛り込まれている点も示した。

研究成果の概要(英文)：I have studied the events in the period of the Prophet Muhammad, using the materials such as the chronologies, egegical sources, Hadith books, geographical materials, and biographies. The studies contributed in the translation of The Life of Muhammad (Yogensha Muhammad Den), vol.3-4, Iwanami shoten, 2011-12. Moreover I pointed out that the negative evaluations in the early Abbasid times against the family of Umayya and Makhzum were reflected in the contents of Ibn Ishaqs biographical work.

研究分野：東洋史

科研費の分科・細目：基盤研究(C)

キーワード：ムハンマド イスラム メッカ

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始するにおいて、預言者ムハンマド時代を研究対象として著述した拙稿15本を大幅に改変、加筆した上で、研究書にして出版するという作業を継続する必要があった。これについては、『預言者ムハンマドとアラブ社会』福村出版、2012年2月に結実することができた。

自分の研究史を整理、概観し、新たな知見を加えつつ単著を執筆する作業は、その後の研究の方向性を確認する上で非常に重要な作業となった。ならんで、本著作の中でも第二部で取り上げた「ジャーヒリーヤ時代の暦法とイスラム暦」について、大幅に内容を改変、進化させて、海外の著名な学術書に投稿するという作業を実施することにした。英文での論文執筆作業には多大な労力が予想されたが、日本のイスラム研究のプレゼンスを海外に示すという作業は、日本のイスラム研究者にとって今日もっとも求められている作業であると痛感させられ、取り組むこととした。また、『預言者ムハンマド伝』岩波書店についても、二巻までは刊行されていたが、残りの第三巻、そして註、解説を網羅した第四巻の刊行が残されていた。初期史研究において根幹となる基本アラビア語史料の翻訳という作業は、日本の学会の研究水準の底上げには必須の作業であり、他の三人の研究者とともに、作業を完結する必要があった。科研費による自分の初期イスラム史研究の進展が、預言者伝の翻訳や解題、解説に大きく貢献することになると思われた。

この種の作業を進める上で、預言者ムハンマド伝の構造、初期イスラム史資料の性格、史料の信憑性の問題、預言者ムハンマドの時代を中心とした初期史研究の根本的見直しという作業も必要となることが予想された。

## 2. 研究の目的

預言者ムハンマドの生涯やイスラム勃興期の歴史、コーランやハディース集(預言者ムハンマドの言行をまとめたもの)の研究は、日本においても、概説書の類は多く出版されているが、専門研究の蓄積は海外に比べると思った以上に少ない。初期イスラム史研究は欧米を中心に研究の蓄積が大量にあり、近年では研究の蓄積も著しい。中東では新たな史料の刊行も相次いでいる。こういった環境の中で、日本のイスラム学が国際的に貢献して発展していくためには、原点資料に基づく堅実な内容の研究蓄積が必須であると考える。預言者ムハンマドが残した遺産は、その後のイスラム世界の政治、経済、法律、思想、生活習慣などあらゆる部分に及び、重要な指針として大きな影響を与えてきた。預言者ムハンマド時代の研究

はそういった意味においてイスラム学の基礎であり、これを等閑視しては今後の中東、イスラムの研究の質的向上は図れないものと思慮する。本研究において、イスラムの信仰体系、社会システム、儀礼の成立・発展に関して、歴史的背景が明確になり、イスラムに関する知見が大きく広がることが期待できる。今後の日本のイスラム学の土台作りに寄与するものである。

## 3. 研究の方法

預言者伝の史料的性格についても総括が必要である。一つの方向性としては以下のような研究方法がある。マフズーム家のアブー・ジャフルやウマイヤ家のアブー・スフヤーンに代表されるように、マフズーム家やウマイヤ家の人間が「ムハンマド伝」等の初期史料では目立って非難されている。これには後世のイスラム世界の政治的対立が背景にあると考えられる。「預言者伝」はアッバース朝初期に成立したものであるが、同朝でのウマイヤ家に対する否定的な評価が、「預言者伝」における内容に大きく反映していると考えられる。こういった史料的性格を考慮に入れながら、預言者ムハンマド時代の史実を掘り起こしていく作業が必要となっている。史料の記述を鵜呑みにするのではなく、史料が編纂された時代の政治的背景を考慮に入れながら、史料がいつに成立していったかを史料操作の可能性を前提としながら、問題意識として強く持つことにしたい。

前イスラム時代からメッカを中心としたヒジャーズ地域で行われていた巡礼儀礼が「別離の巡礼」でいつに確立したかなど、主にスンナ派、シーア派の諸文献を探りつつ、詳細に研究する。巡礼に付随する法規定など史料的制約から実態がほとんど解明されていない諸問題についてもハディース資料を収集、分析していき、歴史資料では明示されない史実を浮かび上がらせていく。偶像崇拜に見られる前イスラム時代の宗教思潮や、ユダヤ、キリスト教の影響のもとで、イスラムの教義がいつに体系化されていったかといった宗教的側面の分析も実施する。また、当時のアラブ部族社会のあり方、商業活動、経済生活の実体等についての解明作業、こういった研究を踏まえての、イスラムの儀礼の成立を総合的に研究していくことにする。

## 4. 研究成果

預言者ムハンマド伝について  
預言者ムハンマド伝(以下、「預言者伝」)  
の著者イブン・イスハークは704年頃、メディナに誕生し、767年バグダードに没した。出身地のメディナや留学先のエ

ジプトで伝承の収集に努め、749年にアッバース朝が成立すると、イラクに移住し、カリフ・マンスールの知己を得、息子の家庭教師をするなどしてカリフ政権の中枢に活躍するに至った。このマンスールに献呈されたのが「預言者伝」である。天地創造からはじまる大部の歴史書である。天地創造から預言者たちの活動を記した「ムブタダー(始まり)」、預言者ムハンマドの布教時代を中心に著述した「マブアス(召命)」そしてムハンマドの遠征活動を中心に記述された「マガーズイー」とからなる大部の三部作からなっており、総称して「マガーズイー」と呼ばれていた。これを預言者ムハンマドの伝記部分を中心に編纂したのが文献学者のイブン・ヒシャーム(833年没)であった。翻訳作業においてはヴェステンフェルト版やカイロ版を用いている。イブン・ヒシャームが、イブン・イスハークの著作のどの程度を削ったのか、完全に分かってはいない。タバリーやアズラキーといった比較的後世の学者が、イブン・イスハークの著述から引用する形で、自著に組み込んでおり、そこから判断するに、クライシュ族の名誉を著しく傷つけたり、メッカの神聖性を損なうような記述は削除されていったらしい。

イブン・イスハークの情報源を探ることは本書の性格を知る上で最も重要な作業と言える。イブン・イスハークがもっとも多くの伝承を採用するのはウマイヤ朝宮廷でも活躍したズフリーである。晩年にヒジャーズに帰郷するにあたってはウマイヤ朝宮廷内での権力抗争も背景にあったと考えられ、したがって、ウマイヤ朝に批判的なスタンスを取ることがほとんどであったメディナの学者のひとり、イブン・イスハークにとっても、彼から情報を得ることに、さほどの障害はなかったと思われる。ズフリーの次に情報を伝えているのがメディナのアンサール、ナッジャール族のアブドゥッラー・ブン・アブー・バクルである。祖父ムハンマドは683年ハッラの戦いで戦死している。この戦いはメディナの住民がウマイヤ朝軍に敗れた戦いであり、メディナ住民に多くの犠牲者を出した。メディナの学者の反ウマイヤ朝傾向を決定づけた戦いであると言える。ただし、このアブドゥッラー・ブン・アブー・バクルの父はウマイヤ朝下にあつて、メディナのカーディー職を務めたほか、アンサールでは初めてメディナの総督に任命されている。アブドゥッラーは、このような父の親ウマイヤ朝的な政治姿勢には懐疑的であったと思われ、ウマイヤ家を誹謗する傾向の伝承を伝えるに至っている。

イブン・イスハークの情報源はこのように反ウマイヤ朝の傾向を持つメディナ

のアンサールが多かった。他には第二次内乱でカリフを名乗ってウマイヤ朝に反旗を翻したアブドゥッラー・ブン・ズバイルの兄弟であるウルワ・ブン・ズバイルの伝承が多く採用されている。ズバイル家の人間が多く伝承家として表れており、このような事実からも本書の反ウマイヤ朝傾向は確認できる。

イブン・イスハークの政治的スタンスは、本書の記述の随所にうかがわれる。ムスリムを迫害しつづけたクライシュ族の有力者の中でもウマイヤ家やマフズーム家への批判は顕著である。ムハンマドの妻にはアブー・スフヤーンの娘ウムム・ハビーバや、マフズーム家のウムム・サラマがあり、ムハンマドの姻戚としてウマイヤ家やマフズーム家は正統カリフ時代からウマイヤ朝にかけて繁栄することになる。預言者伝はアッバース朝時代に成立した書であり、メディナの反ウマイヤ朝傾向が大きく盛り込まれることとなった。

メッカの有力家系の一つであるマフズーム家は、預言者伝によれば、多くの人物がムハンマドのメッカでの布教を妨害して信徒に迫害を加え、ムハンマドのヒジュラ後も、クライシュ族の中核勢力としてメディナのムスリム勢力と軍事的抗争を続けた。ムハンマドのメッカ布教時に、クライシュ族の指導者として信者をきびしく迫害したのはマフズーム家のワリード・ブン・アル・ムギーラ、アブー・ジャフルであり、後者は神罰としてバドルの戦いで殺害される。バドルの戦いでは、メッカの多神教徒側で参戦した人物のうち、アブド・シャムス家(ウマイヤ家を含む)の戦死者が12名に対して、マフズーム家は17名にもものぼる。アブー・ジャフルの息子イクリマや、ワリードの息子で後に「神の剣」と称せられるハーリドは、ウフドの戦いで騎兵を率いてムスリム軍を苦しめた。構成員の多くが改宗するのは、ムハンマドによるメッカ征服時である。アッバース朝カリフ、マンスールに献呈された預言者伝が、アブー・スフヤーンをはじめとするウマイヤ家の人物を批判的に描くのは当然としても、同書におけるマフズーム家の位置づけは、筆者には特異な印象を受ける。

一方でマフズーム家からは、預言者ムハンマドの祖母ファティマが出ており、ムハンマドの妻の一人ウムム・サラマもマフズーム家の出身である。ムハンマドの晩年から、正統カリフ時代、ウマイヤ朝時代にかけて、マフズーム家がいかに政治権力と結びついて権勢をふるっていたのかを各種史料から追跡し、イブン・イスハークをはじめとするメディナの学者たちから否定的に評価されていたことを検証するに至った。

預言者伝に顕著に見られるように初期史料でマフズーム家が批判的に描かれるのは、マフズーム家がウマイヤ朝と密接な関係を持って、ウマイヤ朝時代に権勢をふるったことが原因である。第二次内乱(683-92年)においてウマイヤ朝シリア軍とメディナ住民との間で戦われたハッラの戦い(683年)で、メディナ側は多くの戦死者を出した。侵攻したシリア軍によりイブン・アル・ズバイルが立てこもったメッカは大きな損害を受けた。メディナのアンサールや、ヒシャーム・ブン・ウルワ(イブン・アル・ズバイルの甥)の一族を主な情報源としたイブン・イスクの預言者伝が、ウマイヤ朝権力を呪い、死者を慰める「鎮魂の書」としての性格を帯びるのも無理からぬことであると判断できる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

医王秀行 『『預言者ムハンマド伝』』を読む、歴史と地理(世界史の研究)、no.654,2012年5月,29-36

医王秀行 『マフズーム家の研究』東京女学館大学紀要,11号,2014年3月,1-37

〔学会発表〕(計 1 件)

『『預言者ムハンマド伝』を読む』、日本オリエント学会公開講演会、2013年5月18日、天理ホール

〔図書〕(計 3 件)

『預言者ムハンマドとアラブ社会』福村出版、2012年2月

『預言者ムハンマド伝』第3巻,岩波書店,2011年7月

『預言者ムハンマド伝』第4巻,岩波書店,2012年1月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

医王秀行 (Hideyuki Iō)

東京女学館大学・国際教養学部・教授

研究者番号：20269426